平成１２年度

第３２回　越谷市民文化祭

平成１２年１１月２３日（木）～２６日（日）

越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

於　越谷コミュニティセンター　大ホールホワイエ

◇周りの１０個の輪は、昭和２９年１１月３日に合併した十町村である二町八ケ村（「越谷町」の誕生）をあらわす。
十町村とは、越ケ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を４個集めたもの。
つまり、越谷の『越』（「コ４」）を意味する。

◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。

◇昭和３０年１１月３日には、草加町に合併していた伊原、麦塚、上谷が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和３３年１１月３日に市に昇格し、越谷市となる。

第32回 市民文化祭の
越谷市郷土研究会展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
一	旧増森・中島・花田・小林村の石仏	1～14	加藤　幸一	春日部市大枝
二	越谷吾山とその時代	15	金岡由紀子	大房
三	越谷市内寺院の見所	16～17	菅波　昌夫	南越谷一丁目
四	越谷出身・日本橋千疋屋総本店	18	髙崎　力	平方
五	昭和三十年代の農事風景	19	髙橋　清	新川町一丁目
六	越谷歌人の歌会始め	20	髙山　はつ	大泊
七	越谷と御猟場の印象	21	平井　五六	神明町二丁目
八	武蔵国増林村の変遷	22～24	山本　泰秀	増林二丁目

※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、
越谷市郷土研究会の谷岡隆夫（当会会長・☎62－7527）までお願いします。

次回の展示は
平成１３年３月４日（日）
「平成１２年度　こしがや文化芸術祭」
於 越谷コミュニティーセンター

一　旧増森・中島・花田・小林村の石仏紹介

加藤幸一

これらの石仏の詳細を知りたい方は、調査資料を宝正院や東福寺に置かせて戴いたので、ご請求(無料)願いたい。

旧増森村

(1) 観音堂墓地

最近までこの地に観音堂が建っていたが、平成十年に宝正院に移転・新築され、墓地を残すのみとなった。この地にある図1の石塔には、和歌が刻まれている。

(2) 河原崎の内田稲荷

内田稲荷は、増森一四七五の須賀家西側にひっそりとある。そこに板碑型をした古い庚申塔が見られる(図2)。庚申塔は庚申信仰の記念として建てられたものである。

(3) 宝正院

江戸時代は、東正寺と呼ばれていた寺院。明治四十四年に増林の宝蔵院(現、下組集会所)を合わせ、「宝」と「正」をとって現在名に改められたのである。

宝正院のかつての参道入口に今でも背が高い「高地蔵」(図3)が祭られ、安産の仏様として信仰されている。

(4) 中村家(増森一六五四)路傍

図6は「大日様」と呼ばれ、疫をきってくれる仏様として信仰された石仏である。

(5) 小島酒店(増森一七二三)路傍

店の前の路傍に、「猿田彦大神」と刻まれた神道系の小さな庚申塔がある。

(6) 薬師堂

ここは、かつてあった慈光庵の跡地で、現在ここに県の文化財の二十一仏板碑がある。その他、様々な石仏石塔がある。その一つ図9は、市内で二番目に古いと思われる初期の貴重な庚申塔である。図10は、西は越谷、北は増林、東は榎戸、南は吉川と道しるべが刻まれた庚申塔である。図12は、正面の下部に、右は越谷道、左は野田の山崎道と道しるべが刻まれた庚申塔である。ここ増森と千葉県野田市山崎とは江戸時代の昔から交流がさかんであったことがわかる。図13も道しるべが刻まれた庚申塔で、「赤岩渡し」「榎戸渡し」の渡し場の名前が見られる。「赤岩渡し」は増森村と対岸の下赤岩村を結ぶ古利根川の渡しで、地元では「馬渡し」と呼ばれた。「榎戸渡し」は、増森村と川藤村榎戸の境に流れていた古利根川の渡しで、地元では「さんこう渡し」と呼ばれた。図14も道しるべが刻まれている。

(7) 増森神社

もとは水神社と呼ばれた。図15は、増森村三丁野の須賀家(増森二一一九〇〇)から昭和十三年頃にここに移された庚申塔である。この庚申塔を造立した三丁野の人々の名が正面及び側面に刻まれている。

(8) 中村家(増森二一四七)路傍

図16は、宝暦四年(一七五四)の庚申塔である。ここも三丁野の地である。

(9) 増森新田の稲荷社

庚申塔が四基みられる(図18・19・20・21)。また図22の弁天文字塔の側面には、「真正寺」と刻まれた文字がみられる。すぐ近くの増森新田センターあたりは、かつては真正寺があったとの証拠となる石塔である。

図23は、増森三一九の松井家から移してきた石塔である。松井家は江戸時代は清学院と呼ばれた山伏の寺院であった。明治になると、越ケ谷の久伊豆神社の初代神主を勤めた。

(10) 増森新田センター

ここは、かつては真正寺があった所である。センターそばの墓地の中に、秩父三十四箇所、坂東三十三箇所、西国三十三箇所、四国八十八箇所のすべての百八十八箇所を巡礼した記念に建てた石塔がある(図24)。

(11) 吉田家(増森二四八四)路傍

ここに「奉納　両社遷宮記念　氏子中」と刻まれた高さが約百六十六センチの記念碑と二つの祠があるが、雷電社の祠のすぐそばに図25の雷神宮の石塔が建っている。

(12) 森西川集会所

この集会所のそばに墓地がある。図30の庚申塔に刻まれた「新光寺」の文字によって、ここは真光寺の跡地であることがわかる。図28は、この石塔を奉納した人々の名前がこの石塔の全ての面にすきまなくびっしりと刻み込まれた名号塔である。図29は、「三猿」のみが刻まれた初期の庚申塔である。

旧中島村

(1) 林家(中島一一七九)路傍

図1は庚申塔である。この庚申塔の下部は土に埋もれて外見ではわからないが、鬼と三猿が刻まれていることが判明した。

(2) 中島神社

ここは、稲荷神社と諏訪神社の両神社とすぐそばに正福寺と呼ばれた寺院があった地である。ここに全ての霊を供養するために建てられた三界万霊塔がある(図2)。

(3) 正福寺管轄の共同墓地

図3は六十六部回国塔である。法華経(大乗妙典)をわが国の六十六箇国すべてに納めようと回った記念に建てたものである。

（4）小川家（中島二－八九）路傍

ここに三基の庚申塔がある。図6には、十一面観音をあらわす梵字が主尊として刻まれている。庚申様の主尊が青面金剛として定着する前の初期の庚申塔とわかる。

（5）鈴木家（中島三－六六－一）路傍

図8は、青面金剛像が刻まれたよく見られる庚申塔。

（6）送水管近くの土手道路傍

永田家（中島三－一－一〇）前の土手道路傍には、庚申塔と水神塔がある。水神塔の方は破損が激しいのが残念である。

旧花田村

（1）西円寺

図1は猿田彦を庚申様の主尊ととらえた神道系の庚申塔である。もとは西円寺前の路傍にあった。

図3は、四面に梵字がびっしりと刻まれた供養塔である。

（2）山本家（花田四－二！一）路傍

図15は、和歌山市にある淡島神社の祭神が婦人病に効く神様としての淡島（粟島）信仰が全国的にさかんだった頃の石塔である。

（3）佐藤家（花田四－二〇－一三）路傍

ここにスマッカラ地蔵（図17）がある。スマッカラとは地元の耕地名「砂河原」からきたと思われる。スマッカラ地蔵には次の言い伝えがある。

昔、元荒川が花田の方に花田を囲むように迂回して流れていたころの話である。ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があった。花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれていたこの地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし、堤の上に上げてお祀りしたという。あるいは、地蔵の首の骨が折れて舟が動かなくなったとか、お地蔵様がここに流れ着いたという話も一部残っている。

旧小林村

（1）東小林香取神社

図1は、吉川道、不動道（大相模の不動尊をさす）、越ケ谷道、岩槻道と道しるべが刻まれた庚申塔である。

（2）東福寺

東福寺は砂丘の上に位置している寺院で、かつては境内地やその周囲には松の大木が生い茂り、「東福寺の秋月」として越谷八景の一つに数えられていた名所地であった。

図2は巨大な三界万霊塔である。図3も巨大な石塔である。これ程の石塔を建てた当時の盛況が忍ばれる。

（3）浜野家（東越谷八－一一七）路傍

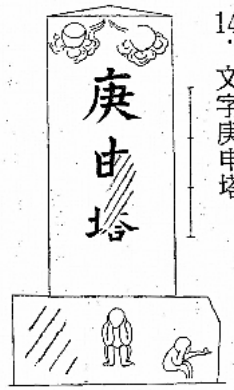
浜野家は屋号を「追分」と呼ばれた。それは一本の道がここで二股の道路（追分）に分かれていたからである。その追分には寛政九年（一七九七）に造立された道標石塔があった。この石塔には、右は岩槻や慈恩寺、左は江戸道という意味の道しるべが刻まれていた。しかし道路工事によってその貴重な道標石塔が行方不明となってしまったために今となってはそれ以上の詳しいことはわからない。

（4）会田家（東越谷二－二－三）路傍

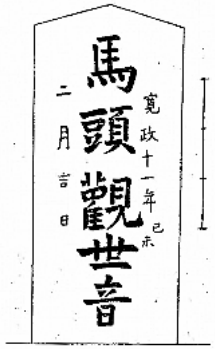
会田家はこの周辺では昔から唯一の民家であった。そして会田家前の元荒川そば路傍には昔から道しるべを兼ねた石仏があった。しかし、心ない人によって破壊され、その石仏の表面や両側面がかなりはがれた状態となってしまった。それが図13の石仏である。地元の人たちはこの石仏を「こうしん様」と呼んできた。多分、庚申塔のことであろう。その道しるべには、江戸何里、野田何里とか刻まれていたと言う。残念ながら今となってはこれ以上のことはわからない。

追加　小林村石仏

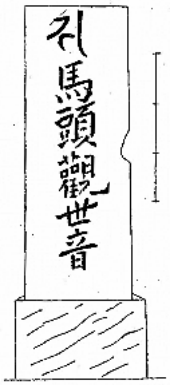
14小林・文字庚申塔



15小林・馬頭観音文字塔



16小林・馬頭観音文字塔



〔参考〕明治二十一年の「荒神文字塔」

No．14　所在地　小林・会田家（東越谷3－17－2）邸内

No．15　所在地　小林・清水家（東越谷3－3－8）邸内

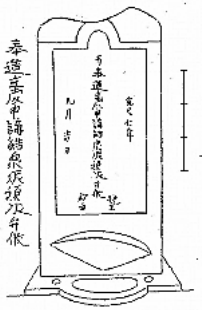
〔参　考〕　所在地　小林・清水家（東越谷3－3－8）南側路傍
※かつては荒神講が毎年2月11日に地元の11軒で持ち回りで行われていた。宮元（講元）は東越谷1－15－10の須賀家である。しかしこの荒神講は平成9年（1997）頃に廃止された。

No．16　所在地　小林・鈴木家（東越谷2－14－4）邸内
※側面に「半右衛門」（鈴木家の先祖）と「四国八十八箇所」の文字が見られる。

旧増森村

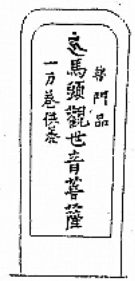
増森 1・敷石供養塔

増森 2・板碑型文字庚申塔



増森 3・「高地蔵尊」石仏

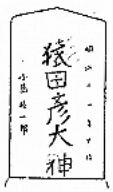
増森 4・馬頭観音文字塔



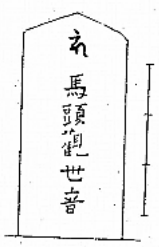
増森 5・普門品供養塔

増森 6・「大日様」石仏

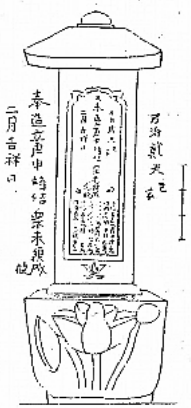
増森 7・猿田彦文字庚申塔



増森 8・馬頭観音文字塔



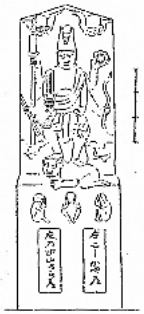
増森 9・万治二年の庚申塔



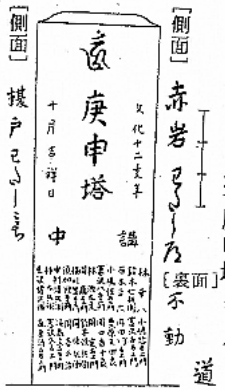
増森 10・道標付き文字庚申塔

増森 11・聖徳太子供養塔

増森 12・道標付き青面金剛像庚申塔

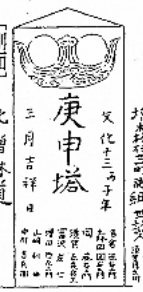


増森 13・道標付文字庚申塔

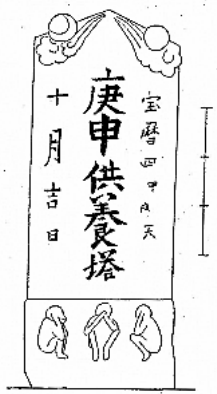


増森 14・道標付き不動明王文字塔

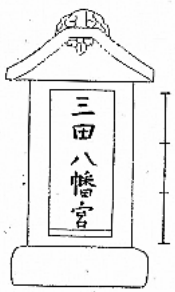
増森 15・道標付き文字庚申塔



増森 16・文字庚申塔



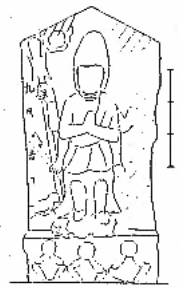
増森 17・三田八幡宮文字塔



増森 18・青面金剛像庚申塔

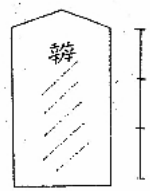
19増森・青面金剛像庚申塔

20増森・青面金剛像庚申塔

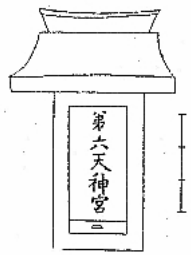


21増森・道標付き青面金剛像庚申塔

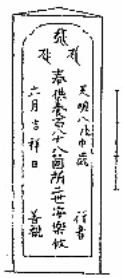
22増森・弁天文字塔



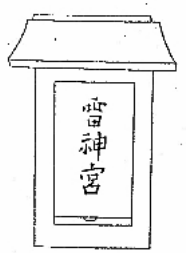
23増森・「第六天」文字塔



24増森・百八十八箇所巡礼塔



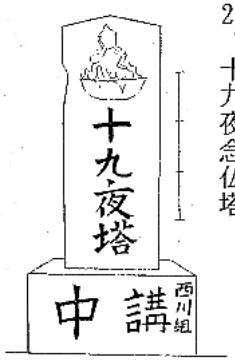
25増森・雷神宮文字塔



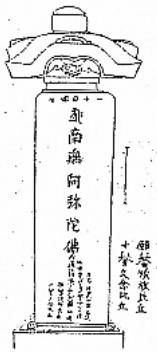
26増森・道標付き文字庚申塔

吉川道

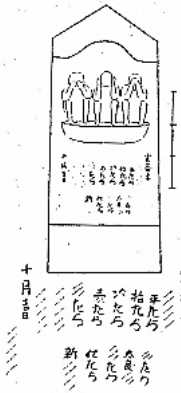
27増森・十九夜念仏塔



28増森・名号塔



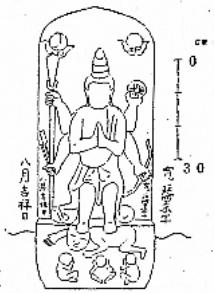
29増森・三猿庚申塔



30増森・青面金剛像庚申塔

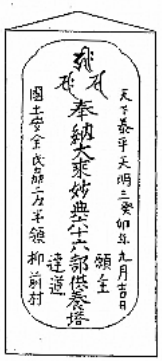
旧中島村

1中島・青面金剛像庚申塔



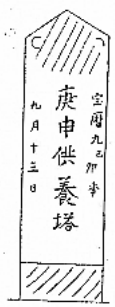
2中島・地蔵像付き三界万霊塔

3中島・六十六部回国塔

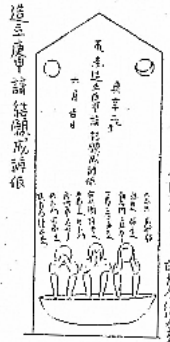


4中島・地蔵像付き念仏塔

5中島・文字庚申塔



6中島・文字庚申塔



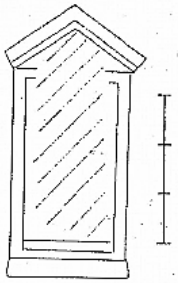
7中島・青面金剛像庚申塔

8中島・青面金剛像庚申塔

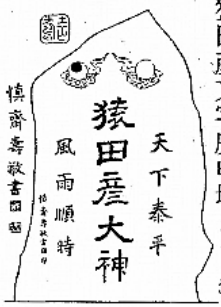
9宮島・青面金剛像庚申塔

旧花田村

10中島・水神文字塔

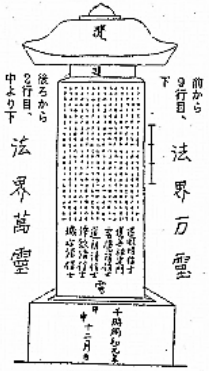


1花田・猿田彦文字庚申塔



2花田・天神文字塔

3花田・梵字呪文供養塔



4花田・十九夜念仏塔

5花田・十九夜念仏塔

6花田・十九夜念仏塔

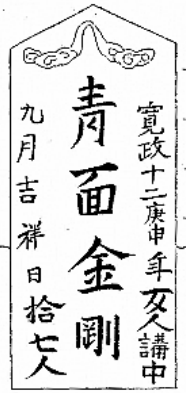
7花田・阿弥陀像付き念仏塔

8花田・文字庚申塔

9花田・十九夜念仏塔

10花田・文字庚申塔

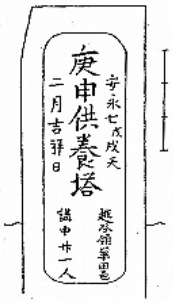
11花田・文字庚申塔



12花田・文字庚申塔

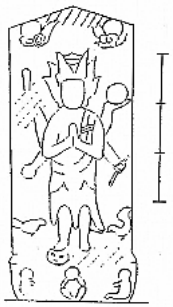
13花田・道標付き文字庚申塔

14花田・文字庚申塔



15花畑・淡島明神文字塔

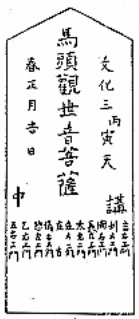
16花畑・青面金剛像庚申塔



17花畑・「スマッカラ地蔵」石仏

18花畑・青面金剛像庚申塔

19花畑・馬頭観音文字塔

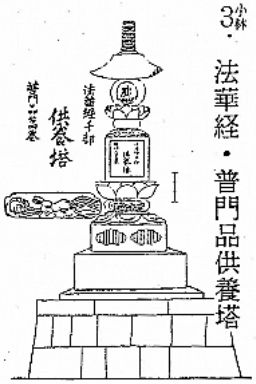


旧小林村

1小林・道標付き文字庚申塔

2小林・地蔵像付き三界萬霊塔

3小林・法華経・普門品供養塔



4小林・観音像付き念仏塔

5小林・十九夜念仏塔

6小林・青面金剛像庚申塔

7小林・大日如来像付き光明真言塔

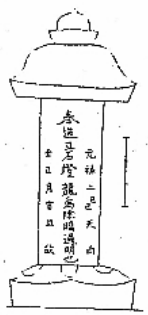
8小林・如意輪観音像付き念仏塔

9小林・大日如来像付き光明真言塔

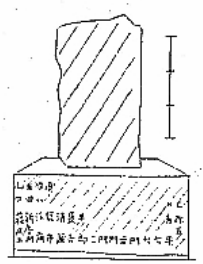
10小林・地蔵像付き念仏塔

11小林・地蔵像付き念仏塔

12小林・石灯籠供養塔



13小林・道標付き「庚申様」石仏



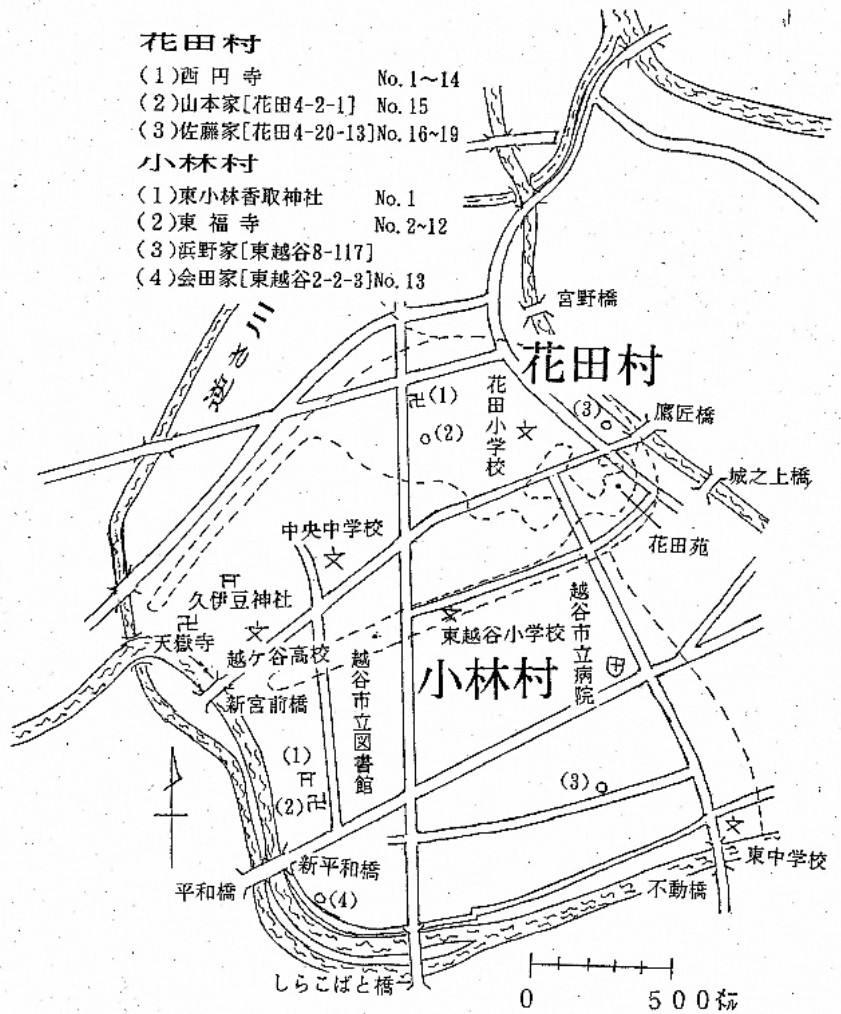
花田・小林の石仏案内図

花田村

(1)西 円 寺　No. 1～14
(2)山本家[花田4-2-1]　No. 15
(3)佐藤家[花田4-20-13]No. 16~19

小林村

(1)東小林香取神社　No. 1
(2)東 福 寺　No. 2~12
(3)浜野家[東越谷8-117]
(4)会田家[東越谷2-2-3]No. 13



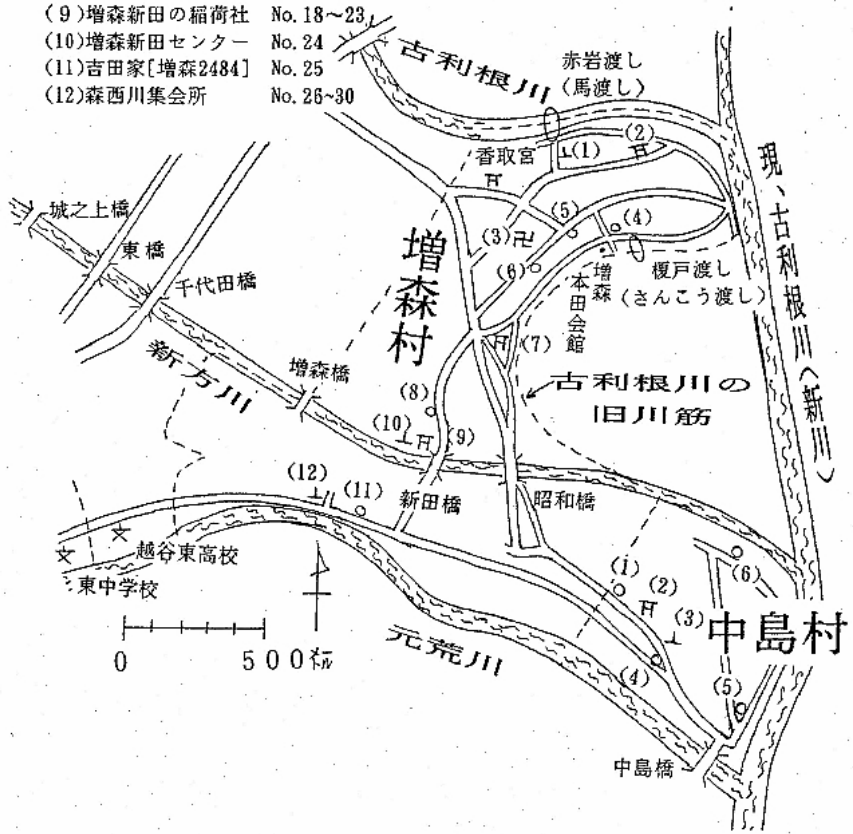
増森・中島の石仏案内図

増森村

(1)観音堂墓地　No. 1
(2)河原崎の内田稲荷　No. 2
(3)宝 正 院　No. 3～5
(4)中村家[増森1654]　No. 6
(5)小島酒店　No. 7
(6)薬 師 堂　No. 8～14
(7)増森神社　No. 15
(8)中村家[増森2-47]　No. 16・17
(9)増森新田の稲荷社　No. 18～23
(10)増森新田センター　No. 24
(11)吉田家[増森2484]　No. 25
(12)森西川集会所　No. 26~30

中島村

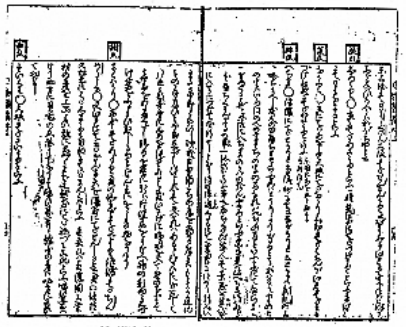
(1)林家[中島1-79]　No. 1
(2)中島神社　No. 2
(3)正福寺管轄の共同墓地No. 3・4
(4)小川家[中島2-89]　No. 5~7
(5)鈴木家[中島3-66-1]　No. 8
(6)送水管近くの土手道路傍　No. 9・10



二　越谷吾山とその時代

金岡　由紀子

吾山墓（越谷・天嶽寺）



物類称呼（国会図書館蔵）

◆吾山とは

江戸時代中期、八代・徳川吉宗のころ、越谷に生まれ、方言を研究した男がいる。越谷吾山（一七一七～八七）。

本名は会田文之助。墓は越谷・天嶽寺にある。

一七六八年（明和五）から江戸に住み、俳諧師として、句集『東海藻』などを刊行している。

弟子に「南総里見八犬伝」の滝沢馬琴の名がみえる。

吾山は、俳諧師というより、文献学・言語学の研究をすすめた。

日本最初の方言研究書「物類称呼」（五冊）を著わしている。

◆大江戸シティの人びと

江戸時代の参勤交代は、交通・経済・通信に大きな影響を与えた。

▼予定をたてて旅行が安全にできる国。

▼手紙や物が確実に届く国。

それが吾山の生きたころの日本であった。

カボチャを見て、「わしの村ではナンキンだが、（共通語としては）カボチャなんだ」とわかる手だてとなることが、物類称呼の意義だった。

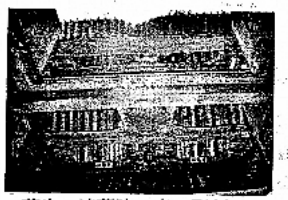
自分の出生地だけでなく、日本をまるごと一つ、と考える人びとは徐徐にふえていく。その意識こそが、明治維新につながる胎動ではないか。と考えると、歴史は楽しいものである。

三　越谷市内寺院の見所

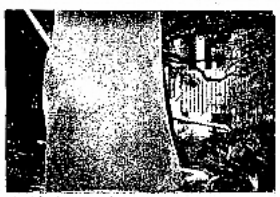
菅波　昌夫

登戸　報土院・羅漢像

瓦曽根　照蓮院・千徳丸碑



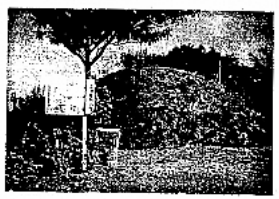
蒲生　清蔵院・竜の彫刻



北越谷　浄光寺・高浜虚子句碑

相模町　大聖寺・山門

北川崎　聖徳寺・塩地蔵



大杉　清浄院・開山塚

野島　浄山寺・大鰐口

増林　林泉寺・駒止めの塚

増林　勝林寺・越谷観音像

一、登戸・報土院（浄土宗）　新阿弥陀三番　天正十年（一五八二）開山
羅漢「修行を完成して尊敬に値する人」の意。市内でこれだけ揃っているのは当寺だけである。
二、蒲生・清蔵院（真言宗）　天文三年（一五三四）開山
山門の龍の彫物は、左甚五郎が一夜の宿の返礼として彫ったという。
三、瓦曽根・照蓮院（真言宗）　天正十年（一五八二）以前の開山
武田氏滅亡後、秋山氏は遺児・千徳丸を伴って瓦曽根に住んだ。早生した千徳丸の供養の五輪塔がある。
四、相模町・大聖寺（真言宗）　天平勝宝二年（七五〇）開山
江戸時代には関東の三大不動といわれた。山門の扁額は老中松平定信筆。徳川家康ゆかりの品を寺宝として伝える。
五、北越谷・浄光寺（真言宗）　慶安元（一六四九）開山
戦前までは梅の名所で有名。「寒けれど　あの一むれも　梅見客」虚子の句碑がある。
六、大松・清浄院（浄土宗）　新阿弥陀六番　嘉慶元年（一三八七）開山
本堂裏の開山塚から人歯と骨片・唐銭が出土した。調査の結果、開基・賢真上人の墓と判明した。
七、北川崎・聖徳寺（浄土宗）　永禄十年（一五六七）開山
安産・子育ての塩地蔵がある。聖徳太子講発祥の地で、毎年五月二二日に太子講が開かれている。
八、増林・勝林寺（曹洞宗）　天文元年（一五三八）開山
昭和五十年、越谷観音が建立された。高さ十二m。十三仏板碑（越谷市の文化財）がある。
九、増林・林泉寺（浄土宗）　新阿弥陀二番　文正元年（一四六六）開山
鷹狩りにきた徳川家康ゆかりの駒止めの槙や権現井戸跡がある。慶長九年（一六〇四）以前、御茶御殿があった。
十、野島・浄山寺（曹洞宗）　貞観二年（八六〇）開山
直径六尺の大鰐口や、徳川家康寄進の寺領三百石を辞退し、代わりに受けた三石の鼻紙朱印状がある。

越谷出身

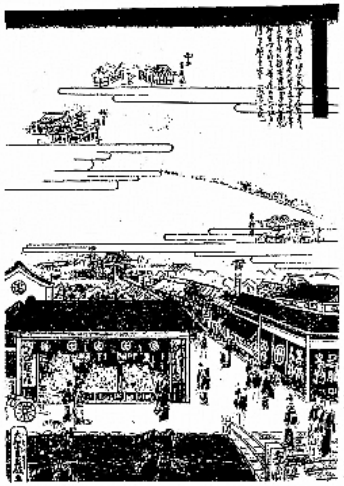
四　日本橋千疋屋総本店

高崎　力

武蔵国埼玉郡千疋村（越谷市東町）の弁蔵が江戸へ出て、葺屋町親爺橋畔（日本橋人形町三丁目）に「水くわし安売り処」千疋屋を開業したのが、天保五年（一八三四）。水くわしとは、現在の果物に対比されるが、外に蔬菜類（野菜）も商い、出身地の名をとって「千疋屋弁蔵」、商標は㊀である。

弁蔵の出身地には古利根川・元荒川があり、砂質土壌の自然堤防上では、代官の奨励によって、桃が栽培されていた。弁蔵は現松伏町築比地や越谷市新方地区・大袋地区生産の桃を、舟荷として中川を下り、日本橋川の親爺橋畔に荷揚げしたので安売りが可能であった。現在の産地直送の元祖か。

二代目文蔵の妻むらは、浅草駒形・鰹節の大店大清の三女で、茶の湯の師匠・渡辺治右衛門に茶の湯奉公をした縁で、当時、江戸一番の料亭といわれた浅草山谷の「八百善」に上がり、この料亭に集まる幕府高官・豪商・文化人らの寵を受けて、文蔵は徳川家の果物・野菜等の御用商人になった。


千疋屋　創業天保5年（1834）

明治維新後は、千疋屋近くの元大名屋敷跡に住んだ西郷隆盛の愛顧を受け「オッカア、デッカな西瓜もって来いよ」と親しく声をかけられる程であった。

征韓論に敗れた西郷が帰郷することになり、「この屋敷あげようか」と言われたが、むらは「あまりお屋敷が大きすぎて……」と辞退したという。

この時いただいていたら、その後どうなったでしょうか。

五　昭和三十年代の農事風景

高橋　清

むかしの綾瀬川

昭和30年ころ
農耕馬による田の耕起

昭和40年ころ
田植えのあいまの一休み

昭和38年　田の除草

一、昔の綾瀬川
下肥船の運行である。この船は通称「親船（おやぶね）」といった。はしけ舟には、この親舟から下肥を積み替えて、さらに上流方面に運んだ。
前方の屋根のある所は、船頭の宿泊する部屋である。
下肥（人糞（じんぷん））は当時、貴重な肥料であった。

二、農耕馬による田の耕起
耕耘機もトラクターも、まだなかった時代だった。
牛や馬に犂（すき）を引かせて田を耕した。

三、田植えの合間の一休み
女性の野良着姿は、今ではもう見られない。なつかしい風景だ。

四、田の除草
この作業を「八反ころがし」といった。稲の間を勢いよくころがし、砕土と除草をした。
今では、除草剤の普及によりやっていない。

参考文献　「越谷市JA30年のあゆみ」

六　越谷歌人の歌会始め

高山　はつ

大正十年、新年恒例の宮中歌会始めのご勅題は、「社頭暁」（社殿のあたりの暁）であった。
当時、越谷でも歌人の愛好者が集い、同じ題でよんだ自分たちの歌を披露しあった。
縦一五五㎝　横一〇㎝の板に達筆で書かれている。短冊懸けのように、板の上部に穴があけられている。
越ヶ谷本町、鍛冶忠会田家の秘蔵の品である。

大正十年　天皇御製
かみまつるわか白妙のそての上に　かつうすれゆく　みあかしのかけ

越谷歌人の歌

暁のまず光をば我が国の　千代の栄えと祈る産土　知園
詣ずれば宿りし宮は森鳥　いずこをさして暁のそら　松声
日ごとなるつとめの道や暁に　宮の砂ふむもろ人ぞこそ
新しき心も年と産土の　鈴の音きよく夜は明けにけり
飛び立った鳥は一の鳥居かな　我は社頭に暁のそら　一映
宮守りの　爺耶が頭照らす暁

越谷歌人の短冊

七　越谷と御猟場の印象

平井五六

昭和三七年ごろ、越谷御猟場へ初めていった。

つとめ先の上司、渋谷常吉氏（大沢一丁目在住）の紹介で、御猟場見学の許可をもらった。

渋谷氏は、洋服仕立てを営んでいたが、戦時中の徴用令により廃業し、勤め人になった。

当時、私は北千住に住んでいた。越谷に御猟場があるとはしらなかった。

越谷駅に降りたつと、ひなびた駅舎で駅前に倉庫らしき建物があった。馬がつないでありそうな風景だった。

旧道は木造二階建てがつづき、中川酒店があった。

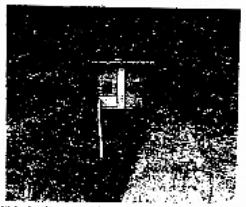
御猟場はひろく、草ぼうぼうであった。いろいろな施設の説明をきいたが、よく判らなかった。すべてが珍しかった。

御猟場にだけ、水洗トイレがあるときいた。

四十年ちかく前の、越谷の町並みと御猟場の印象はわすれがたい。

この越谷に住むようになろうとは、おもってもいなかった。

鷹匠小屋（いまはない）



引き堀（鴨をさそいこむ）

越谷大桃林

改築前の越谷駅

見学のみなさん

八　武蔵国増林村の変遷

山本泰秀

1．「勝林寺由緒記」等による勝林寺開山に至る歴史

増林（ましばやし）の勝林寺の歴史をたどると、万寿二年（一〇二五）三月十日、源勝によって天台宗として聖観音を安置して開山された。後の世になって、寺は無人となり荒廃したが、天文元年（一五三二）に黙堂閣契（ぎんかい）によって再興され禅宗に改宗し、今日に至っている。

岩槻市にある福厳寺（ふくごんじ）の九世の弧心月が書き改めた福厳寺由緒記によると、黙堂閣契は、岩槻渋江氏の長男として生まれ、大永年間（一五二一～二八）頃に菖蒲町にある三箇村（さんがむら）の長龍寺で得度したといわれる。黙堂閣契はやがて長龍寺三世となり、後に岩槻の福厳寺を開山。その一年後に増林の勝林寺をも開山したのである。

禅宗としての勝林寺開山について、勝林寺大工七兵衛なる人物が書き記した「寛文十三癸丑年（一六七三）二月吉祥覚（おぼえ）」によると、天文元年（一五三二）九月、黙堂閣契の弟子天松玄固が、岩槻城に祀ってあった十一面観音を譲り受け、播州の仏師により修復させ、勝林寺に安置した。また涅槃像一幅は妻子の為に修造したという。なお、開山した黙堂閣契は、天文七年四月十二日の酉の刻に六十才で示寂、二世の天松玄固は天文二十三年五月八日に示寂（年齢は不明）している。

2．下総国に属した増林

当地、増林が古き時代は下総国であった史実は勝林寺由緒記にも見える。「下総国葛飾郡百間郷下河辺山中里」と出ている。山中（やまなか）とは、県道東京平方線の道路から勝林寺山門の方に向かって右側の地域を指す。左側の地域は宿組（しゅくぐみ）、現在の中組である。山中と宿組の名残は、今も六道帳（葬式の際の記録帳）にみられ、勝林寺の過去帳にも記されている。当地の始まりとして、寺の起こりとのかかわりで話される「山中三軒、宿六軒」の言い伝えが今でも残っている。いつの頃からかは定かではないが、源勝の寺の開山の頃からずっといわれ続けてきたのであろう。

次に金沢文庫文書の嘉元三年（一三〇五）の記述をみると、金沢（現、横浜市金沢）の称名寺は瀬戸橋造営の為に下総国下河辺庄新方などの所領に棟別銭を課している。ここに出てくる新方とは、古隅田川、元荒川、古利根川に囲まれた地域で、現在の岩槻市、春日部市、越谷市のそれぞれの一部をさ

す。当然、増林も新方に含まれている。当時増林はまだ下総国に属していたのである。

3．増林が下総国から武蔵国に編入された時期について

中世史に造詣の深い岩井茂氏の著書『道灌と岩付太田氏の動静』の中の序文中程をそのまま引用すると次のとおり。

「中世新方庄と称された地域（岩槻市川通地区、越谷市増林地区、新方地区、桜井地区、大沢地区、袋山を除く大袋地区、及び春日部市武里地区、豊春地区の古隅田川以南旧粕壁町全域）は、応永以後の室町時代中期武蔵国に編入され、次に旧庄内古河以西の地域で葛飾郡部が正保三年以前、江戸時代初頭に武蔵に編入された」

しかし、私は増林が下総から武蔵に編入された年代は、もっと後世ではないかと個人的に思っている。そして武蔵への編入は、「武蔵田園簿」又は「正保田園簿」完成年代と係わりが深いと考えて次のように推論した。正保三年（一六四六）二月、大目付井上政重と目付宮城和甫が総裁となり、川越城主松平信綱、忍城主阿部忠秋、小田切昌快、雨宮正種、遠山為庸らで慶安元年（一六四八）十二月二十五日、武蔵、上総両国を巡検して国図を作成するように命ぜられ、翌二年五月十五日に出発した。又、埼玉年略では、慶安二年十二月、幕府は武蔵、下総に命じて地図を調整させ、先に正保年間に命じたので正保武蔵国図という。

「武蔵田園簿」に記載され、幕領三万一千石余を支配していた代官高室昌成が慶安三年に病死していること等を総合して考えると、「武蔵田園簿」が作成された時期は慶安二年から三年にかけてであると思われる。

さらに増林の勝林寺所有の菖蒲の長龍寺の住職が慶安二年（一六四九）七月二日に書いた古文書（増林の勝林寺所有）の中に「下総国増林村」との記述がある。

慶安二年の「下総国増林村」との記述が正確である限り、以上の観点から、増林が武蔵国に編入した年代については、慶安二年（一六四九）七月二日以降ではないかと私は考えた。この勝林寺所蔵の古文書は増林の武蔵国編入時期を解明する上での貴重な資料であることは間違いないのである。

4．「郡村史」の記述にみられる明治以降の増林の変遷

本村は、古来新方領に属する。天正十八年庚寅（一五九〇）、徳川氏の有に帰し、後、代官の支配にして維新の初め、武蔵県に隷し、明治二年己巳（一八六九）正月、大宮県となり、既にして浦和県と改称し、四年辛未（一八七一）十一月、埼玉県の管とする所となる。

勝林寺所有の慶安二年の古文書

慶安二年（一六四九）作成のこの古文書には『下総国増林村』との文字が見られる。増林がいつ頃から下総国から武蔵国に編入されたかを解く鍵となる貴重な古文書と思われる。

一武州崎玉郡菖蒲領三ケ村慈高山長龍寺
由緒之事。
一後土御門院御宇、応仁元己亥年中、大洞和尚開闢之地也。従大洞和尚至拙僧迄十一代、歴数百七十余也。
往古者、最乗寺本住、骨畠長泉寺与半回異
論之有由来古道場也。
一権現様御入国之砌、伊奈備前守殿、御指置御座候。
一境内竪百廿間、横百間、客殿九間半、横六間、小庫理六間半、大庫理七間半、衆寮七間、山門・総門有之者也。
一當寺従開闢以来、末寺、岩付領福厳寺法幢之地也。下総国増林村勝林寺法幢之地也。上大崎長珠庵、同下大崎善龍寺、三ケ村明珠庵、辻村永勝庵、飛柏崎円福寺、以上七ケ寺、従先規長龍寺之末寺ニ御座候。
右之條々於違背者、拙僧共宗門之御法度ニ可被仰付候。為後日之、仍如件。

慶安二己丑年七月二日　　長龍寺　尊□判（尊貴判カ）

寺社　　証拠人
御奉行所　　幸福寺　判
　　正法院　判

※「大洞」は、長泉寺、永福寺、長龍寺を開山した。
※「最乗寺」は、相模国足柄郡にある由緒高い寺院。
※「骨畠」は、児玉郡高柳村にある字名。
※「飛」は、飛び地のこと。

今年度の「歴史講座」の紹介

第１回　「秩父原人の時代－－旧石器時代の謎－－」
　　講　師　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　石岡憲雄氏
　　日　時　９月２日（土）　午後６時３０分～９時
　　場　所　越谷市中央市民会館４階会議室

第２回　「三内丸山人の時代－－縄文時代の謎－－」
　　講　師　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　石岡憲雄氏
　　日　時　１０月２１日（土）　午後６時３０分～９時
　　場　所　越谷産業会館（旧商工会館）集会室

第３回　「吉野ケ里人の時代－－弥生時代の謎　－」
　　講　師　越谷市教育委員会　橋本充史氏
　　日　時　１１月１１日（土）　午後６時３０分～９時
　　場　所　越谷市中央市民会館４階会議室

※この後は、第４回の古墳時代を埼玉県埋蔵文化財調査事業団の高橋一夫氏に、第５回の奈良・平安時代を埼玉県立越谷高校の高崎光司氏にそれぞれお話しをいただく予定です。

今年の「史跡めぐり」の紹介

第２７３回　１月　３日（月）「浅草名所七福神めぐり」（山田政信）
第２７４回　２月２７日（日）「バス史跡めぐり・深谷市とその周辺」（平川陽一）
第２７５回　３月２６日（日）「石仏めぐり《旧増林村》」（加藤幸一）
第２７６回　４月　２日（日）「花に誘われ内堀を歩く」（山田政信）
第２７７回　４月２３日（日）「岩槻の春」（元、県立さきたま資料館館長の大村進氏）
第２７８回　５月　５日（金）「葛飾区郷土と天文の博物館《特別展・怪加版》」（高崎　力）
第２７９回　５月２８日（日）「古墳・高級住宅地・渓谷そして最後は美術館」（宮川　進）
第２８０回　７月２３日（日）「今年の暑気払は懐かしのＳＬ・長瀞ライン下り」（宮川　進）
第２８１回　９月２０日（水）「バス史跡めぐり・日光大猷院廟奥の院・特別公開」（野村勝八）
第２８２回　１０月１４日（土）「テレビ大河ドラマ先取り《北条時宗》の鎌倉」（宮川　進）
第２８３回　１１月１９日（日）「秋！日蓮の足跡を市川にたどる」（小原勝三郎）

最近１年間の「研究発表会」の紹介

第１２５回　６月２７日（日）「わが街・蒲生の歴史こぼれ話」（高橋正道）
第１２６回　８月２２日（日）創立３５周年記念講演会
　　「江戸中期・俳諧師・師竹庵越谷吾山」（早稲田大学名誉教授・杉本つとむ氏）
第１２７回　１月３０日（日）創立３５周年記念講演会
　　「非運の戦国武将・太田資正」（元、埼玉県立さきたま資料館長・大村進氏）
第１２８回　６月２５日（日）「越谷生まれの江戸町人の活躍」（高崎　力）